

第16回全国大会

(2016年11月26日(土)、於 筑波大学東京キャンパス文京校舎)

要 旨

I 研究発表

第一室 (116室)

1. J. バスティアン＝ルパージュとJ. W. ウォーターハウスの作品における身体の「外化」——ヴィクトリア朝のガラス文化と写真、絵画
山口 茜 (筑波大学大学院)

ヴィクトリア朝において、人々の身体は街中に溢れたガラスに映し出されて「外化」し、他者の視線に無制限に晒された。そうして「外化」した新しい身体イメージは、芸術家の関心を集めたと考えられる。《南のマリアナ》、《エコーとナルキッソス》等、多くの作品で鏡や、鏡と同様の働きをする水面を描いたJ. W. ウォーターハウスもその一人であり、彼のガラスへの関心は、レンズと鏡を内蔵したカメラが写し出す写真にも向けられた。ウォーターハウスの狂気の女性像には、同時代にロンドンで活躍した画家J. バスティアン＝ルパージュが『サルベトリエール写真図像集』のヒステリー患者の写真を利用して描いた作品の影響がうかがえる。ウォーターハウスが描いた鏡と水面に映った身体とヒステリーの表情は、写真を通して「外化」した身体を作品に取り入れているのだが、そこには新たに物語が加えられ、新しい身体イメージが乗り越えうるものとして描かれている。

2. ジュリア・マーガレット・キャメロンの写真とラファエル前派主義
吉本 和弘 (県立広島大学)

アルフレッド・テニソンは詩集『国王牧歌』(*Idylls of the King and Other Poems*)出版に向けて、当時写真家として認められつつあったジュリア・マーガレット・キャメロンに写真で挿絵を製作するよう依頼した。撮影された

写真は結局挿絵として採用されなかったため、キャメロンは大型写真13枚を貼り付けた手書き版詩集を自力で出版したが、これは商業的には成功しなかった。

発表では、キャメロンの写真と同じテーマで描かれた先行する挿絵や同時期のラファエル前派による絵画との類似点を指摘して、テニソンが謳うロマン主義的な幻想としての騎士道精神と禁断の恋の世界を視覚化するに際し、写真と絵画がどのように影響し合ったのかを考察した。キャメロンが独特のソフトフォーカスや演出によって表現した中世趣味や幻想性が、写真が本来持つリアリティーとある種の虚構性によって暴かれてしまう危険を孕んでいることを示唆した。

3. T. H. ハクスリーの宗教信仰

藤田 祐 (釧路公立大学)

T. H. ハクスリーは、「科学対宗教」という対立図式において「科学」の側を体現する人物だと見なされがちである。しかし、ハクスリーを対象とした学術研究では、ハクスリーと宗教との関連性についても論じられており、報告の前半で先行研究の様々なアプローチを整理した。その上で報告の後半では、ハクスリーの救世軍批判、ヴィクトリア時代後期を代表する「実証主義者」(コント主義者)であるフレデリック・ハリソンとの論争、晩年におけるハクスリー思想の集大成である「進化と倫理」を取り上げ、ハクスリーの宗教信仰を探究した。ハクスリーの議論もキリスト教の枠組みにおける言葉遣いや問題設定を引き継いでおり、理性を重視する潮流に対して人間の墮落を強調する潮流との共通性も読み取れる。晩年のハクスリー思想は、狂信的な宗教に対する批判であるとともに、カルヴァン主義や福音主義の延長線上に位置づけることも可能なのである。

第二室(117室)

1. ラザフォード・オールコックの文化観と英国の日本趣味

——1862年第2回ロンドン万国博覧会を通して

濱島 広大(筑波大学大学院)

第2回ロンドン万国博覧会の日本部門を監修したラザフォード・オールコック(1809-1897)の英国の日本趣味への影響力の大きさは知られているが、彼の万博の監修意図や文化観についての研究はなかった。本発表ではオールコックの監修意図を彼の著作等を通して明らかにし、またその監修意図から見える彼の文化観を分析した。

日本人の生活の再現という監修意図の下、オールコックは日本各地に赴き、その土地で使用される日用品や工芸品を収集した。本発表では彼の展示品の収集状況や場所を彼自身の記録(万博のカタログや『大君の都』等)から明らかにした。例えば陶磁器類を、江戸、横浜、岡崎、大坂、長崎にて5~15シリングで購入していた。展示の背景にはオールコックの「生活」に基づく独特な文化観があった。日本部門を訪れた遣欧使節団の淵辺徳藏は骨董店のようだと酷評したが、実はその会場は「理想的な生活」というオールコック流の接着剤でつなぎ留められた空間であった。

2. ウィリアム・モリスの北方趣味とデモクラシー

清川 祥恵(神戸大学)

ウィリアム・モリスは、1880年代以降社会活動のヴィジョンを明確に言語化してゆくにあたり、「真のデモクラシー」を「fellowshipの実践」として掲げる。本発表では、それにさいしてモリスの「北方」趣味が果たした役割とその重要性を明らかにした。モリスは70年代にアイスランドを二度訪問し、同地での体験は晩年にかけてのロマンス作品にも直接反映されている。モリスの「北方」趣味の特色は、サガ文学および過去の社会制度への関心が、根源的な生活の美しさの希求へと収斂していくという点にある。モリスは、きびしいアイスランドの風景を後期ロマンスの舞台として引用

することで、「芸術」や「美しさ」がすなわち虚飾のきらびやかさをさすのではなく、自立した生活そのものを表していること、つまりモリスの理想の追求には、時代や環境に左右されずに日々の営みに向き合う生き方の実践こそが必要であることを、効果的に訴えたのである。

II シンポジウム (134室)

ヴィクトリアニズムとモダニズム ―― 分断と継承

司会：川端 康雄 (日本女子大学)

20世紀前半、第一次世界大戦を境にして、ヴィクトリア朝の文化的産物は(特に知識層のなかで)かなり評判が悪くなり、代わってモダニズムが盛期を迎える。思想運動や芸術運動の常として、自身の独自性を打ち出すために、先行する運動体と自身との差異をことさらに際立たせようとする傾向はたしかにある。「モダニズム」対「ヴィクトリアニズム」という対立図式もこれに入るわけだろう。時がたって過去をふりかえったときに、狭義の「モダニズム」の当事者たちの自己演出と、前世代の思潮からの断絶の身ぶりが相対化され、それまで気づかずにいた類似点に目がむけられるようになった。ヴィクトリア朝時代の文芸思潮と20世紀「モダニズム」の連続性に注目する、見直しの試みが増えてきた。

このシンポジウムではそうした連続性に力点を置き、ラファエル前派の美学、唯美主義運動、あるいはジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの芸術思想など、モダニズム期以降に「残滓」として片隅に追いやられたようにみえたヴィクトリア朝の「遺物」が、かたちを変えてさまざまな場所で継承されていった次第を確認し、それらの「遺物」を今日どのように生かすのか、その可能性を検討した。

1920年代の中世主義的モダニズム——協働の継承に向けて

パネリスト：木下 誠 (成城大学)

1873年にヨークシャーで生まれたアルフレッド・リチャード・オラージュの功績は、ヴィクトリアニズムとモダニズム、その分断と継承をめぐる格好の考察対象である。ヴィクトリア朝研究の観点からは、彼が身を置いたイングランド北部における社会主義運動のネットワークとその後の展開に関心が向けられるだろう。一方、モダニズム研究の文脈では、ロンドンのアヴァンギャルドな文芸週刊誌『ニューエイジ』の編集者としての仕事が重要となる。『ニューエイジ』はオラージュの編集方針のもとでギルド社会主義を育んだメディアでもあった。本発表ではこうしたオラージュの活動を再評価する試みとして、マイケル・T. セイラーが『大戦間期イングランドのアヴァンギャルド——中世主義的モダニズムとロンドンの地下鉄』で導入した中世主義的モダニズムの系譜を確認した。それはジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの思想および実践における中世主義を継承しつつ、そこにモダニズムの美学を接ぎ木する流れであり、ブルームズベリー・グループが代表するような「審美主義的」モダニズムとは別の、「機能主義的」なもうひとつのモダニズムのあり方であった。

唯美主義とモダニズムのあわいで

パネリスト：荒川 裕子 (法政大学)

美術の領域においては、「マネとポスト印象派」展をはじめ1910年代前半に開催された幾つかの展覧会を契機に、大陸なかんずくフランスからもたらされたモダニズムが、それまでのヴィクトリア朝美術に完全に取って代わったという物語が長らく「正史」とされてきた。だがそれは、あくまでアヴァンギャルドに照準を合わせた歴史であり、専らプライベートなギャラリーを舞台として展開されたものであった。その一方で、たとえば「イギリス美術専門のナショナル・ギャラリー」として19世紀末に創設されたテイト・ギャラリー(現テイト・ブリテン)では、ヴィクトリア朝後期

に生まれた唯美主義絵画や、さらにはロイヤル・アカデミー系の画家たちによる作品が、20世紀に入ってもなお「モダン・ブリティッシュ」の美術として公衆に提示されていた。このような展示の動向は、モダニズムの受容をめぐる立ち遅れととらえるよりも、むしろヴィクトリア朝時代に形成された公共美術館という文化装置のもつ社会的機能が、次の時代にも継承されたためと考えることができるのではないだろうか。

まちづくりがヴィクトリア朝時代から学ぶこと

パネリスト：山崎 亮 (studio-L代表、東北芸術工科大学)

まちづくりの仕事をしていると、ヴィクトリア朝時代に学ぶべき点を見出すことが多い。手仕事が機械に取って代わられつつある時代にアーツ・アンド・クラフツの職人たちが持っていた問題意識が、ウェブ2.0や人工知能の時代にも当てはまるものであったり、分業による人間性の分割という問題が、現在の働き方にも共通する課題だったり。機械化にしても分業にしても、その後は加速度的に広まった働き方だが、それによって失われたものも多かった。その結果が見えているのが現在である。作業の効率化や拡大化が我々の生活を豊かにしないのではないかという疑問は、地域の未来を考えるうえでも大いに参考となるものだ。我々が取り組むまちづくりとは、結局のところ地域でどう働いて生きていくのかを地域の住民たちと話し合い、企画し、実行していくことである。そのとき、我々の人生や地域のあり方をどう考えるべきなのかを共有しておく必要があるのだが、ヴィクトリア朝時代を生きた人たちが検討し実践していたことは、とても参考になるし、大きな勇気をもたらしてくれている。

III 特別講演 (134室)

ヴィクトリア朝の人びとと投資文化

坂本 優一郎 (大阪経済大学)

近代社会が投資の原理をビルト・インした社会であったとすると、ヴィクトリア朝の英国社会はまさに「投資社会」の典型であったとみなせる。そこでは富める者も貧しき者も、階級や男女の別なく、年齢を問わず、債券や株式への投資と直接・間接に関わりをもつにいたったのである。それでは、「投資社会」に呼応する「投資文化」なるものは、はたしてそこに認められうるのだろうか。仮に認められるとすれば、どのような分析視角によってそれに迫ることができるのであろうか。

講演では、ヴィクトリア期の文学作品を手掛かりに、作品中の登場人物たちをとりまく「投資社会」の表象のありかたに注目した。また、表象のみならず、作品の作者と現実の「投資社会」との関係をも明らかにした。さらに、「投資社会」が国境を越えて拡大してゆくことをふまえ、投資と文化の関係についてもまた、たとえば同時代のフランスをも視野におさめうることを示した。